

供養と南無の意味

『事理供養御書』 (建治二年・一二七六)

(本文)

いのちと申す物は一切の財の中に第一の財なり。遍満三千界無有直身命(へんまんさんぜんかむうじきしんみょう)とてかかれて、三千大千世界にみて候財をいのちにはかへぬ事に候なり。さればいのちはともしび(燈)のごとし。食はあぶら(油)のごとし。あぶらつくればともしびきへぬ。食なければいのちたへぬ。

一切のかみ仏(ほとけ)をうやまいたてまつる始(はじめ)の句(く)には、南無(なむ)と申す文字をき候なり。南無と申すはいかなる事(こと)ぞと申すに、南無と申すは天竺(てんじく)のことばにて候。漢土(かんど)・日本には帰命(きみよう)と申す。帰命と申すは我が命を仏に奉ると申す事なり。我が身には分(ぶん)に随(したが)ひて妻子(さいし)・眷属(けんぞく)・所領(しよりよう)・金銀(きんぎん)等をもてる人々もあり、又財(ざい)なき人々もあり。財あるも財なきも、命と申す財(たから)にすぎて候財(たから)は候はず。さればいにしへの聖人賢人(しようにんけんじん)と申すは、命を仏にまいらせて仏にはなり候なり

(現代語訳)

命というものはすべての財宝の中の第一に大切な財物である。あまねく三千世界の中において身命にあたいするものはないと説かれているが、まことに三千大千世界のすべての財物をもつても命にかえることは、とても出来ないことである。したがって命は燈火のようなものであり、食物は油のようなものである。油が尽きると燈火が消えてしまうように、食物がなければ命は断たれてしまう。

すべての神・仏を敬いたてまつる時には、まず最初に「南無」という字から始まっている。南無というのはインドの言葉で、中国や日本では帰命という。帰命とはわが命を仏に奉ることである。わが身にはそれぞれの分に応じて妻子や使用人、土地や資金等を持っている人もいるし、また持っていない人々もいる。しかしこうした財産を持っている人でも持っていない人であっても、命という財宝に過ぎた財宝はない。したがって昔の聖人・賢人といわれる人々は、自分の命を仏に奉って、その功德で仏になったのである。